

# 巻 頭 言

南山短期大学人間関係科の一年生にとって毎週一回養護学校などで一日を過ごすフィールドワークは苦勞も多いが深い豊かな経験の場となっている。大部分の学生は人間関係科に入学するまで重度の身体障害や知恵おくれの子供と接する機会はなかったに違いない。普段自分達から一番遠いと思われているこれらの子供達と直接に接しながら人間関係を原点にたって体験をするという目的で8年前からフィールドワークは始められた。

かなり重度の心身障害の子供達と接してまず彼女達がぶつかる大きな壁は、どのようにして言葉が殆どなく、その意味で人間らしい応答は困難であるように見える子供達とコミュニケーションをとるかということである。一生懸命語りかけても答えがなく、忍耐強く食事を食べさせてあげてもなんの反応もないという状態から実習は始まる。しかし、回を重ねるにつれてそれまで自分達が日常生活で慣れてきた言葉によるコミュニケーションから脱却し、彼女達が子供達と本当に向き合って関わろうとする時はじめて何か理解し合えるものを彼女達は掴み始める。学生達が、自分の事をさしおいて全身で子供に向き合って関わり始めるとき、子供達が応答するのは言葉によってではなく、やはり子供達の出来る全ての方法を使つての応答である。

学生のフィールドワーク日誌から引用してみよう。

「(前略) 次の時には気を付けました。イライラした気持ちをTちゃんに悟られてはいけない。悟られたら余計に食べてくれなくなっちゃいそうで心を落ち着けて食べさせました。Tちゃんの笑顔がこぼれるととても嬉しくて安心できました。笑うと食べさせにくいんだけど、笑顔がないと心配でたまらない。

その後で、Tちゃんとお散歩したけど、その時も笑顔、笑顔でケタケタ笑ってくれて、とにかくホッとしました。」

年齢的にも上で、そして何の障害もないこの学生はTちゃんの笑顔によって彼女の側の関わりが引き出され、笑顔を通してTちゃんとの関わりが深められていく。この関わりには言葉はないが、学生とTちゃんの間「対話」であるといってもよいであろう。そしてこの関わりを始めた時から学生にとってTちゃんはかけがいのない存在性を持つ“人”となり、学生もTちゃんに関わる自分の存在を確認するようになる。笑顔を返すTちゃんに声をかけ笑いかける学生、二人の間のこの「対話」を想像すると、私の心は何か暖かいもので包まれる思いがする。

私達は今日あまりにも言葉に依存し過ぎ、言葉の渦の中に生活しているといっても過言ではない。その言葉の交わり合いは時にはぶつかり合を避けてすれ違ったり、意識の表面を流れ去ったりしてしまうことが多いようである。学生の養護学校での体験は、このような状況にあって、「関わり」とは、「対話」とは何かを私達に考えさせてくれる。

人間関係の原点にある「対話」は様々な意味や側面、そして豊かな広がりを持っている。「対話」を特集した今号が、そういった意味や広がりをいま一度考えるきっかけとなれば幸いである。

伊 藤 雅 子